特 260
48

土佐の草とり

始

特260
48

帝國圖書館藏

土佐の草とり

蕨檟堂

私が下手ながら三十餘年間歌を作つて遊んで居ることが出來たのは、正岡子規先生の御指導に依ることは勿論であるが、萬葉集などうやらのみこむことが出來たのは、全く鹿持雅澄先生の「萬葉集古義」の御蔭である。鹿持先生は明治以前に亡くなられた人であるが、私は今日猶存生して居られる如く尊敬して居る。又私が道端に生えて居る草も分らなかつたのに、その草の名をいくらか知ることが出來るやうになつたのは、牧野先生の御教導に依るものとして常に深く感謝して居る。そこでいつか一度は四國に遊び、正岡先生の御郷里たる伊豫、鹿持牧野兩先生の御郷里たる土佐の風物に接したいと思つて居つたが、なか〳〵さういふ機會が無かつた。ところへ牧野先生より、土佐へ植物採集に行くから一緒に行かないかといふ御話があつたので、早速同志とばかり御供することになつた。

四國で名高い山は石槌山や劔山であらうが、私は土佐の横倉山を尊い山と思うて居る。それは平氏の傳說がある爲ではない、牧野先生が家も忘れて幾回となくこの山に登り、植物を研究して今日の植物界に盡された多大の功績や、この山あるによつて吉野川の流も清く、所謂山水秀靈の地に偉人を生ずることを思ふからであつた。然るに土佐へ行つて横倉山に登つて見ると、この靈山の樹木は次第に伐られて、何年かの後には禿山になるだらうと云はれてゐる。鹿持先生の御墓も僅に一片の石を存するのみで、一寸尋れた位では分らない。私は三度尋ねてやつと御墓に詣ることが出來た。隨分下らぬ人の墓が立派に出來てゐる世の中に、あれだけ國文學に盡された鹿持先生の御墓があるかないか分らぬやうでは、まことに情ない次第と云はなければならぬ。横倉山の樹木はどうかして保存して置きたい、鹿持先生の奥津城は立派にして置きたい、と私は切に希ふのである。

「土佐の草とり」は雜誌「阿迦雲」に發表した旅中の詠草である。今この一冊とするに當り多少の補正を加へた。片々たるものではあるが、之を以て一は牧野先生に御禮を申上げ、一は植物採集の際いろ〳〵御世話になつた土佐の諸彥に感謝し記念して置きたく思ふのである。

昭和十一年八月　下浣

櫃堂記

横倉山杉原神社境内大杉

土佐の草とり

昭和九年七月三十日土佐に遊ばむさして八街驛にて與世里、鈴木、根本氏等同行四人會す。東京驛午後八時十分の急行列車に乘る。

山北の驛も過ぎて箱根路にかゝれる汽車に夜はふけにつゝ

山の間をひた走りゆく汽車窻に霧のせまりて夜は明けむとす

近江に夜は全く明けて遙に湖を見る。

汽車中に朝餉終りて霧はるゝ近江の湖を見つゝ過ぎゆく

朝雲のかこむ近江の湖をそがひに見つゝ汽車走りゆく

神戸に下車、湊川神社を拜む。

御社の殿の古材に造りたる神さぶゑまを吾買ひてゆく

み社の裏邊のま木に軍跡しぬぶか蟬の聲のしげけく

湊川公園

湊川の公園の内に年ふりし松をし見つゝ昔しぬばゆ

六甲山に登る

綠陰鶯なけば白雲のたなびく空にほとゝぎすなく

すみれ草吾掘り居れば鶯は山の常陰に谷わたりなく

ほとゝぎすなく空ひくゝほのかすみ薄絹つゝむ海も家村も
秋近き山の木末をみ空ゆくケーブルの上ゆ見つゝ下るも

八月一日午後八時土佐ゆきの汽船に乗る

涼みすと甲板の上に立ち見れば淡路海原星月夜なり
ぬば玉の夜を終夜にゆく船に波もたゝなく人靜まれり
吾船は室戸の岬に夜はあけて高知港に近づきにけり

土佐に入る

汽車に一夜船に一夜をあかしつゝ高知港に今著きにけり
新米を二毛とるちふ土佐の國のま夏の田居に早稲穂垂れたり
日むかひの高知の夏田稲を刈り耕す小田に苗を又植う

長濱

長濱の松の木陰の奥津城に白くにほへる濱木綿の花
濱木綿の花さく磯の淸らかに海風交り松風の吹く
紫のはまごう花のさきにほふ土佐の長濱ゆくがさやけさ
わだつみの風を荒みか長濱の松のこと〱横たはり立つ

桂濱

大丈夫の龍馬の像の立つ丘に海原荒く波のよせくも
桂濱海原ひかりのぼりくる月をめでけむ大町桂月
土佐の國桂濱邊のさやけさは銚子の磯の君が濱に似たり

山の上海の磯邊の草とりて桂が濱に舟待つ吾は

臨水館に宿る

鏡川岸邊に立てる新室のさやけき宿に吾はとまれり
夜風よみ旅の館の窻ひらき採り集めたる草をながめつ

横倉山を詠める歌竝反歌

土佐の國の横倉山は、土こえて草木の茂り、八千草の繁み生ふ山と、瑞草の牧野博士が、家忘れ登りし山、草採りて嘆きし山、大杉の林の中は、もゆる火の眞夏涼しく、麓べは川もさやけし、其の山に生ふる靈し木、日本にはたゞに一本、神代より名もあらなくに、横倉の木とは名づけし、其の山の石垣が中は、其のかみに平家のうから、安德の天皇の、假宮と定め給ひて、長くも仕へまつりし、今もなほみ跡のありと、里人ら傳へごと說く、古ゆ貴き山の、横倉の山

反歌

傳へごとまことたがはずば横倉の山は昔は都にかありし
土佐の國横倉山の大杉は八十年伐るも伐りつきぬちふ
あなたふと横倉山の大杉は神社圍みて天聳え立つ
神代さぶ杉原根呂の大杉は本べ苔むす幾世經ぬらむ
大杉が下に吾立ちて草枕旅の驗と寫眞うつせり
家づとと吾めづらしみとる草は大杉が下の鍋わりの草
苔むせる大杉が根に腰かけて山の神さびながめけるかも

室戸岬に遊びてよめる歌竝短歌

うばめかしあこう木の群、枝交へ繁みに生ひ立ち、青みどり雲とたなびく、其の岡の上をたかみと、白ぬりの燈臺の、そゝり立つ室戸岬は、磯邊には奇岩むらの、立ちかさなり臥しかさなり、岩たぎる波岩走る波、朝には黄金玉散り、夕には白金玉散る、道の端の岩間磯邊の、玉齒朶を掘りてはしぬび、蘆竹を採りてめづるも、南の國の美草と、植物採集の人らよろこぶ、見はるかす大海原は、巖も嶋もさやるものなく、天地のそぐへも知らに、洋々と望はるけし、風のむた波のさわげば、わだの原大きいぶきに、雄心もい湧き起るも、この國に生れし男子ら、偉き人多くし出でて、み國もる干城となりし、室戸岬の秀靈しき見つゝ、思ほゆるかも

短歌

あこう木の室戸岬の巖の秀に嶋かげもなき大海を見つ
うちながむ室戸岬の海原に胸戸を開き風に嘯く
亞米利加の國の山の端見ゆるまで思ほゆるかも室戸岬は
あこう木の室戸岬の奇岩に波はよせくも大和田の波
天たるゝ遙けき沖を諸艦の往き通ふ見ゆ目にさはりなく
南の室戸岬にうるはしき梧桐林吾は見にけり
上總人土佐の室戸の磯めぐり名も知らぬ草多くとりけり

福井の里に鹿持雅澄先生の墓を弔ふ

朝はやみ小川邊ゆきて菜を洗ふ女にきゝつ鹿持が奥津城
朝露にしぬゝにぬれて岡畑の榧の下陰尋ねまはるも
ところづら吾尋ね行けば奥津城は小さき石に歌ゑりてあり

同長歌一首並反歌

其のかみにありける時に、萬葉の古義あらはして、歌の道敎へ開きし、土佐の國の鹿持の大人が、奥津城を吾立ち見れば、岡畑の榧の木陰に、永き世の驗にせむと、後人の偲びにせむと、建てられし碑はも、三尺ばかり小さき石に、大人が歌ゑりてありけり、奥津城はもる人なきか、里べには家も見えなく、花手向く人もあらなく、夏の日の朝霧中に、白菩のむせる淋しさ、ひざまづきしぬびをろがみ、あたりべを見つゝ嘆くも、國文の學びの道に、尊くも吾思ふ大人の、萬代に語りつぐべき、これやこの奥津城所、見ればかなしも

反歌

花たむく人もあらなく奥津城の榧大になれ見つゝしぬばむ

大杉村神社に大杉を見る

二本の大杉繁り森をなす神の社はたふときろかも
大杉の茂り尊し村の名も大杉村とよびてきにけり
蒼雲をおほすぎ村の大杉は二本合ひてなりし大杉

鏡水樓に宴して牧野先生に呈す

土佐の國はみ山の美國海美國少女のとものともしき美國

阿波大歩危川を下る

うすあをくすきとほる水のいや深く何の魚ぞも川底に見ゆ
五百箇巖のさびたる見つゝ大歩危の清き河原舟下りゆく
舟下る大歩危川の川岸の岩割るゝ音ひびきてきこゆ

山高く川風きよく奇巖の重なる見つゝ舟をいそがす
川水の流にまかせ舟中ゆ阿波の山々仰ぎ見るかも
いやきよくひた蒼てれる河淵は流るともなく水の音もなし
川岸の岩のふるさび神代なすてれる川面に雲は浮べり
大歩危の岩のあやしも岸高く鶏の泊り岩大獅子の岩
たゝなはる高き山の上しゞに生ふる常磐木映ゆる河のさやけさ
舟こぎて巖間々々に見るものは皆瑞々し神さびにけり
大歩危を舟くだりきてかへり見る小歩危の巖の二本の松
幼子の小歩危の巖に生ふる木もいやさや見ゆる清き河原
阿波の國の大歩危小歩危五百箇巖に生ふる異草繡にみてにけり

池田驛より汽車に乘りて小松嶋に到る

玉藻吉讃岐の山に灯のともる夕涼しく吾汽車走る

船小松嶋を發して大阪に向ふ

難波津にい向ふ船の波の音のとゞろ〳〵とさ夜はふけつゝ
ぬば玉の夜船の中に土佐の海や阿波の山河目をはなれなく
朝づく日海原ひかり押し照るや難波港に舟つきにけり

歸路高野山に遊びてよめる

諸木々の繁み立つ坂をこえくれば二王おはせり大門の中
天の原高野の山の奥深み佛の廟灯のかゞよへり

蒼雲に聳ゆる杉の大杉を高野の山に誰か植ゑけむ
高野の山風もさやけし仰ぎ見る大杉の上に白雲棚引く
杉山の山間山間に寺建てゝみ佛まつる高野杉山
こゝにして大杉見つゝあらかねの土の尊き思ほゆるかも
大杉の深山の中になく鳥は夜深みなく佛法僧の鳥
大杉を吹きくる風に山清く經讀む聲も澄み渡るかも
山人ら林つくらば蒼雲の高野の杉の大に造らね
人の住む國のこと〴〵寺はあれど高野の山の杉森の寺
佛座す高野の山を下りきて大阪の夜の賑ひを見つ

八日家に歸る

土佐の國の蓬萊齒朶や濱木綿や家庭に植ゑて見れば樂しも

（非賣品）
昭和十一年九月十五日　印刷
昭和十一年九月二十日　發行
千葉縣山武郡睦岡村埴谷四五〇
著作兼發行人　蕨　直治郎
東京府北多摩郡府中町九八六一
印刷人　萩原清雄

終